士族屯田の入植地における神社の研究
―根室地域を例として―

遠藤　由紀子

本発表は、博士論文の一部となる発表である。明治中期、根室地域に士族籍を限定として募集された屯田兵村が形成された。その和田兵村と太田兵村における神社の動向を調査した。調査目的として、根室地域の屯田兵村と神社の関係の性格を位置づけ、それぞれの入植者の出身藩への帰属意識の有無を考察した。調査対象は、屯田兵の出身地、離散率、神社の祭神などであった。両屯田兵村とも開拓地には和田神社・豊受神社という官制の神社が勧請された。勧請することになったその経緯であるが、発起人は政府から派遣されてきた屯田兵幹部であった。神社は「国家の祭祀」としての機能も求められていた。開拓地で、全屯田兵が官制の神社の前で例祭を行い、敬っていたことから、士族屯田兵村地と雖も、かつて藩に仕えた藩士としてではなく、国家の一員となった士族の姿があったと考察できる。

一方、太田兵村に入植した旧米澤藩士は、出身者が集う親睦組織を作り、官制の神社以外に、故郷を偲ぶ上杉神社を勧請した経緯があった。しかし、残留率が低いために現在はその形を残していない。明治20年代の根室地域に入植した屯田兵が出身藩に固執する行動は「個人」の問題となっていたことを考察した。今後の課題として、平民籍の募集に拠った屯田兵村と神社の関係を考察したい。